

イエスのことば 第24回

「まことに、あなたがたに言います。人の子らは、どんな罪も赦していただけます。また、どれほど神を冒瀆することを言っても、赦していただけます。しかし、聖霊を冒瀆する者は、だれも永遠に赦されず、永遠の罪に定められます。」このように言われたのは、彼らが、「イエスは汚れた霊につかれている」と言っていたからである（マルコ 3：28～30）

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 「承」の部において、これまでに 12 の権威を見てきた。
2. 続いて、ローマ軍団の将校がイエスの権威を認めた出来事。イエスは百人隊長の信仰を高く評価すると共に、将来、世界中の異邦人がアブラハム契約の祝福に与かることを予告した。
3. この後、「承」の部の結末、メシア拒否に入った。
 - (1) まず、拒否の前触れは、先駆者ヨハネから出た。獄中にあったヨハネは、本当にイエスがメシアかどうか、迷って、イエスに質問を送った。しかし、イエスはヨハネを高く評価し、彼はメシアの先駆者としての使命を完全に果たしたと語った。そして、真の問題は、ヨハネとイエスを受け入れようとしない指導者層にあると教えた。
 - (2) イエスは、ガリラヤ地方の町々に対して、その不信仰を責めた。
 - (3) 拒否を目前にしていた時期における出来事を 2 つ見た。
 - ① 指導者層のひとりが、イエスを批判する口実を見つけようとして、イエスを食事に招いたときの出来事。ある一人の「罪人」と呼ばれる女性がイエスに対する信仰を行動で示した。
 - ② 第 3 次宣教旅行（ルカ 8：1～3）。イエスは拒否を目前にしてもなお、神の国の福音を宣べ伝え続けた。このとき、多くの女性たちが自分の財産をもって一行に仕えた。
 - (4) 今回は、いよいよ、指導者層が公式に、イエスをメシアではないと拒否した出来事である。

□本日のアウトライン

1. イエス周辺の状況（マルコ 3：20～21）
2. 指導者層による拒否（マルコ 3：22、マタイ 12：22～24）
3. イエスの反論（マルコ 3：23～27、マタイ 12：25～29）
4. 聖霊を冒瀆する罪とその二つの結果（マルコ 3：28～30、マタイ 12：30～37）

□本日の内容

1. イエス周辺の状況（マルコ 3：20～21）
 - (1) 20 節 a 宣教旅行からガリラヤ地方に戻り、カペナウムの「家に戻られた」
 - (2) 20 節 b 「**群衆が再び集まって来た**」、「**イエスと弟子たちは食事をする暇もなかった**」
 - (3) 21 節 イエスの様子は何か変わってきている。人々が「**イエスはおかしくなった**」と言っていた。これを聞いて、イエスの身内の者たち（友人たち）はイエスを連れ戻しに出かけた。
 - (4) 【22 節】 ユダヤ地方のエルサレムから律法学者たちが来ていた。彼らは、メシア宣言をした人物を審査する調査団である、調査は、観察—審問—判定の 3 段階で行われる。この時すでに、エルサレムのユダヤ議会サンヘドリンでの判定を終わっていた。調査団は、その判定結果をもったうえで、来ている。
2. 指導者層による拒否（マルコ 3：22、マタイ 12：22～24）
 - (1) マルコ 3：22 「**エルサレムから下って来た律法学者たち**」＝調査団は、これまでの調査の結果、イエスをメシアではないと判定した旨、公表した。そのいきさつを詳しく記すのは、マタイの福音書。
 - (2) マタイ 12：22～23 公表のきっかけとなった出来事
 - ① 「**悪霊につかれて目が見えず、口もきけない人**」
 - ② 口をきけなくする悪霊・・・当時のユダヤ教パリサイ派のラビたちも、悪霊の追い出しをしていたが、その方法は【悪霊につかれている人に向かって話しかけて悪霊の名を聞きだす→その名を呼んで出て行くように命じる】。よって、口をきけなくする悪霊の場合は追い出し不可能。そのような悪霊を追い出すことができるのは、メシアである、と民衆に教えていた。
 - ③ 22 節 イエスが口をきけなくする悪霊を追い出した。悪霊につかれていた人は癒されて、「**その人はものを言い、目も見えるようになった。**」
 - ④ 23 節 「**群衆はみな驚いて**」・・・パリサイ派ラビたちのこれまでの教えによれば、イエスはメシアである。
 - ⑤ 群衆は言った。「**もしかすると、この人はダビデの子なのではないだろうか。**」
「ダビデの子」とは、メシアの称号である。＝この人はメシアなのか？

(3) マタイ 12:24 調査団の公式発表

① 用意されていた公式発表

パリサイ派が、メシアしかできないと教えていた奇跡は、3つあった。
 第一、ユダヤ人のツァラアト患者の清め、
 第二、口をきけなくする悪霊の追い出し
 第三、生まれつき目の見えない人を見えるようにすること

今回は、第二の奇跡に該当するが、すでに第一のユダヤ人のツァラアト患者の清めは起きていた（ルカ 5:12～16 →調査開始へ 5:17）。

パリサイ派は判断を迫られていた。イエスをメシアとして認めるかどうか。パリサイ派としては、彼らの言い伝え（口伝律法）をイエスが尊重しない以上、彼らもイエスをメシアとして認めることはできなかった。しかし、もしイエスをメシアではないとするなら、イエスがして見せたメシア的奇跡について、パリサイ派としてどのように説明するのか、が問題であった。

パリサイ派の答えは、「イエスはベルゼブルにつかわれている」、「イエスの力は、悪霊たちのかしらから来ている」となった。ベルゼブルとは、悪霊たちのかしらであるサタンを指す呼称である。

この判定結果を携えて、律法学者たち＝調査団は、エルサレムからガリラヤ地方に下って来て、イエスの近くに来ていた。

② 群衆に対する調査団の公式発表・・・「この人が悪霊たちを追い出しているのは、ただ悪霊たちのかしらベルゼブルによることだ。」

3. イエスの反論（マルコ 3:23～27、マタイ 12:25～29）

(1) マルコ 3:23～26 「どうしてサタンがサタンを追い出せるのですか。もし国が内部で分裂したら、その国は立ち行きません。もし家が内部で分裂したら、その家は立ち行きません。もし、サタンが自らに敵対して立ち、分裂したら、立ち行かずに滅んでしまいます。」

① 調査団の判定理由は、真実ではない。なぜなら、それはサタンの国が分裂していることになるからである。

② マタイ 12:25～26 同じ

(2) マルコ 3:27 「まず強い者を縛り上げなければ、だれも、強い者の家に入って、家財を略奪することはできません。縛り上げれば、その家を略奪できます。」

① この奇跡は、イエスがサタンよりも強いということを示している。決して、イエスがサタンに支配されているということではない。

② マタイ 12:29 同じ

(3) マタイの福音書はさらに2つのポイントを挙げている。

- ① マタイ 12:27 「また、もしわたしが、ベルゼブルによって悪霊たちを追い出しているとしたら、あなたがたの子らが追い出しているのは、だれによってなのですか。あなたがたの子らが、あなたがたをさばく者となります」
パリサイ派が悪霊の追い出しについて、これまで民衆に教えてきたことの中に、【悪霊を追い出す力は、神からの賜物である】、というのがある。そして、パリサイ派も実際に悪霊の追い出しをしている。今回の判定理由は、彼らが教えてきたこと、していることと矛盾する。
- ② マタイ 12:28 「しかし、わたしが、神の御霊によって悪霊たちを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです」
イエスはサタンの力によってではなく、神の御霊によって悪霊たちを追い出している。この奇跡は、イエスがメシアであり、「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ 1:15) というイエスのメッセージが神から来ているものであることを、神が認証したものである。

イエスが神の御霊すなわち聖霊によってメシア的奇跡をして見せているのにイエスを汚れた霊につかれていると判定することは、**聖霊を冒瀆する罪**である

4. 聖霊を冒瀆する罪とその二つの結果 (マルコ 3:28~30、マタイ 12:30~37)

(1) この罪の3つの特徴

- ① これは、集団的・民族的な罪である。個人が犯せる罪ではない。
- ② この罪は、イエスを目の前にしていた当時のユダヤ人たちの世代が犯した罪である。彼らよりも前の世代や、後の世代が犯せる罪ではない。よって、今の世代のユダヤ人たちがイエスをメシアではないと否定しても、それは聖霊を冒瀆する罪には当たらない。
- ③ この罪は、ユダヤ人、イスラエル民族だけの罪であって、他の民族は関係ない。イエスが遣わされたのは、イスラエル民族の油注がれた者(メシア)としてであって、他の民族に向けて遣わされていなかった。この罪は、メシアとイスラエル民族との関係における罪である。

(2) この罪の第一の結果・・・メシアの王国を提供することについて

- ① イエスは、この世代のユダヤ人たちにメシアの王国を提供しようとしたが、それは拒否された。よって、この世代への提供はとりやめ。
- ② メシアの王国は、将来の世代のユダヤ人たちに提供されることとなった。その世代とは、大患難期の世代におけるユダヤ人たちであり、彼らはイエスをメシアとして認めるであろう。
- ③ その将来の世代については、マタイの福音書 24章 1~33節で預言。

- (3) この罪の第二の結果・・・この邪悪な世代に対する裁き
- ① エルサレム陥落・神殿の崩壊に伴い、多くのユダヤ人が命を失うか、奴隷になる。預言は、マタイ 23:36～24:2、ルカ 19:41～44、ルカ 21:20～24。紀元 70 年に現実となった。
 - ② イエスラ民族が回帰不能点を越えるのは、今回が 3 度目。
 - 1 度目、民数記 13～14 章 12 人の斥候の報告と民の反乱
→40 年間の荒野の旅。荒野でその世代は死に絶えて、約束の地には入れなかった。例外は、正しい報告をした 2 人、ヨシュアとカレブのみ。
 - 2 度目、Ⅱ列王記 21 章 マナセ王の治世下 (BC697【12 歳】～BC686【23 歳】～BC642【67 歳】) における流血と偶像崇拜
→ユダ王国の滅亡とエルサレム陥落・神殿破壊 (BC586)・バビロン捕囚 (第 1 回捕囚 BC605、第 2 回捕囚 BC597、第 3 回 BC586、クロス王の勅令 BC538、帰還民による神殿再建着工 BC536)
 - ③ 注意 民族的な罪が回帰不能点を越えても、個人的な霊的救いは、「恵みにより、信仰を通して」・・・マナセも晩年、悔い改めて救われた (Ⅱ歴 33:10～13)
- (4) この罪の第二の結果を、当時の世代のユダヤ人たちが個人的に免れるためには
- ① イエスをメシアとして信じ、人前でイエスを認める・・・マタイ 10:32～39
 - ② 紀元 30 年の五旬節の日に聖霊が降臨し、教会がスタートして以降は、イエス・キリストの名によって水のバプテスマを受ける。このバプテスマを受ける意味は、聖霊を冒瀆する罪を犯した邪悪な世代であると認め、イエスを十字架につけた民族的な罪を悔い改めること。同時に、①と同じ、周囲のユダヤ人に対して、自分はイエスをメシアとして認めたことを表明することになる・・・使徒 2:36～42
 - ③ エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、滅亡が近づいたことを悟り、ユダヤにいる人たちは、山へ逃げる。エルサレムの中にいる人たちはそこから出て行く (エルサレムが堅固な要塞都市であっても、そこに立てこもってはならない)、田舎にいる人たちはエルサレムに入ってはいけない・・・ルカ 21:20～21
- ローマとユダヤの戦役は紀元 67 年から 74 年にかけて起きた。この中で、エルサレムは紀元 69 年から 70 年にかけての包囲戦で陥落。73 年にはマサダの要塞が陥落した。
- 戦役の前段階の紀元 64～66 年の時期に、ユダヤで散発的な反乱があり、エルサレムが一時、ローマ軍に包囲されたことがあった。これを見て、教会の信者たちは、ローマ軍が引いたあと、ヨルダン川東側の山地の町ペラへ避難した。その結果、紀元 70 年のエルサレム陥落には巻き込まれなかった。